

聖書で、最初に祈りを捧げ始めたのは、アダムの三男セトの子どもエノシュの時代からであったと記されています。それはさすらいの地に住むアダムの長男カインの六代目の子孫にあたるシメクが力を持ち、復讐の鬼となって叫び声をあげた頃です。恐怖が忍び寄っていることを感じます。



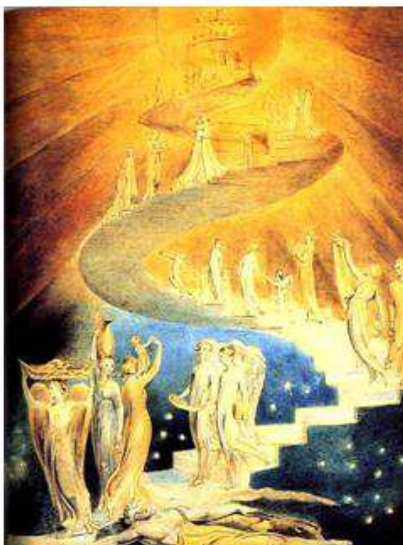
桃井和馬氏 撮影

その後、地に悪が増し、地の全てを滅ぼすとの神の裁きの声を聞いた無垢の人ノアは神が命じる通りに箱舟を作って、洪水を免れました。神は祝福を与える方です。ノアはまず、祭壇(祈りの場所)を作り、神に感謝を捧げました。この時神は「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしはこのたびしたように生き物をことごとく打つことは二度とすまい」と人間の罪深さを許容されました。神は赦す方です。そして「雲の中の虹」が神の永遠の

祝福の印、神が被造物との間に立てた契約の印であるとノアに伝えました。

けれども人間は神の祝福を素直に受け止めず、自分の欲望だけを追求する道を進んでいくのです。信仰の祖といわれるアブラハムは過去を断ち切って、新世界を目指すように神に促されます。アブラハムは「主の言葉に従って旅立った」と記されています。どんな時、彼は神の言葉を聞いたのでしょうか。カナン地方に辿りついた時(感謝)、親族の間で争いが起き、分かれた時(苦悩)、子どもが与えられず神の約束を信じられなくなった時(不信)、親族の住む地が滅びる危険があった時(恐怖)、取り成し(願い)、サラのゆえの災難(後悔)、部族戦争を平和裏に解決できた時(感謝)、息子を神に捧げる時(決断)など、人生の危機に直面すると必ずアブラハムはそこに祭壇を築き、祈っています。

息子のイサクは妻に子が与えられるように(願い)、飢饉の時、エジプトに逃れずペリシテに留まった時(決断)、掘り当てた井戸を奪われ、新たに与えられた時(感謝)、祈る姿が記されています。イサクは「主の山に備えあり」という神の祝福を、身をもって体験し、素直に信じる人として生涯を全うしています。妻リベカは妊娠して、胎内で子どもが争うため、祈るために家を離れて出かけました。その時、当時のしきたりを否定する、「兄が弟に仕える」という神の言葉を聞くのです。リベカはこの神の言葉に忠実に聞き従って、ヤコブを選ぶようになったのです。



ヤコブの階段 William Blake

ヤコブは兄を裏切るという事件から、逃亡の旅を始めます。彼の人生は恐怖、不安の連続でした。けれども最初に見た「天の階段を上り下りする御使い」の夢があまりに美しく、力強く、ヤコブは神の祝福と守護を信じる道に賭けます。働いている時も祈りながら、自分の道を求めています。何かする時も「父イサクの恐れ敬う方にかけて誓った」とあります。いつも真剣なヤコブを見て、妻たちも夫を信頼し、「どうか今すぐ、神さまがあなたに告げられたとおりになさってください」と彼の信仰にならって、神に従っています。なんととっても裏切った兄に再会する前に祈るヤコブの姿は圧巻です。「祝福してくださるまでは離しません」といって、粘りに粘って神に助けを求めています。神様も根負け(?)してしまいます。帰郷後も祈りつつ生活しています。ヤコブは夢の話息子ヨセフにし、ヨセフはそれを心に刻みつけたことでしょう。